

## 音形を持たない接辞としての補文標識 (null Complementizer : null C)

著者名(日)	井上 和子
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	9
ページ	49-64
発行年	2010-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000655/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000655/</a>

# 音形を持たない接辞としての補文標識 (null Complementizer: null C)

井上和子

神田外語大学

補文標識の中には、主名詞句の内容を表す補文（同格詞句と呼ぶ）を作る「という」「との」とは別に純粋に補文を導入する「と」がある。(i(c))はその例である。

- (i)-(a) 「昨日太平洋岸に津波があった」というニュース
- (b) 「次の会合には出席する」との加藤氏のことば
- (c) 議長は「明日の会議は延期する」といった。
- (d) 議長が欠席したことが問題にされた。
- (e) 地震のニュースが一部に伝わらなかった事実が明らかになった。

これまでの研究では、補文を名詞化する「こと」「事実」(i(d-e))と「と」を区別するに留まり、「と」に関する詳しい研究は無かった。本論文では、「と」の統語上、意味上の特徴を検討し、これらの分布と機能を説明するのに二種類の「と」を仮定し、その根拠を示す。

## 0. はじめに

日本語の補文標識として、名詞化を伴うものに「こと」「事実」などがある。それに対して「と」はある意味で純粋に補文の標識として働く。そのために、「と」について詳しい論考が行われることが無かった。本論文では、二種類の「と」、補文標識句(CP)内に留まる「と1」と主文動詞の位置に上がる可能性を持つ「と2」を仮定する。

## 1. 先行研究

### 1.1. 英語について

英語では補文が定時制(*finite tense*)を持つ場合には、*that* が補

文標識として働き、補文が不定詞の場合には *for* が用いられる。

- (1) a. I prefer( that) Kathy would come earlier than she plans.
- b. I prefer Kathy to come earlier than she plans.
- c. I prefer very much for Kathy to come earlier.

補文標識の生起を許さないのは(2)のような場合である。

- (2) a. \*Who<sub>i</sub> do you think that t<sub>i</sub> loves Bill?  
(*that* に *who* の痕跡 *t* が続いている。\**that t* effect と呼ばれる現象である。)
- b. \*Who<sub>i</sub> do you prefer for t<sub>i</sub> to come early?  
(補文標識 *for* に *t* が続いており、(2a)と同様に非文を作っている。)

補文が右方転移(right dislocation, extraposition)を起こしている場合には、主語の抜き取りは許されるが(3a)、目的語の抜き取り(3b)は非文を派生する。

- (3) a. Who<sub>i</sub> do you believe t<sub>j</sub> sincerely [t<sub>i</sub> likes Natasha]<sub>j</sub>  
(Kim (20a))
- b. \*Who<sub>i</sub> do you believe t<sub>j</sub> sincerely [Natasha likes t<sub>i</sub>]<sub>j</sub>  
(Kim (20b))

以上のような補文標識の生起を扱うために、(4)(5)(6)の仮説が提示されてきた。

- (4) Pesetsky (1991):  
null C は zero 接辞 (音形を持たない接辞) である。
- (5) Bošković and Lasnik (2003):  
補文標識には、*that* と null C があり、null C は音韻部門で主文に引き上げられ主動詞に付加されなければならない。

(6) Kwang-sup Kim:

- (a) 語彙部門には、接辞としての null C のみが存在する。
- (b) null C は補文動詞の位置に下がる(hop down)ことも、主文動詞の位置に上がることもできる。
- (c) *that/for* は、構造上 null C が接辞として付加できない場合に最後の手段として音韻部門で挿入される。

音形を持たない補文標識が拘束形式(bound form)として主文動詞または補文動詞の位置に移動し、これらと結合するという上記(4)(5)(6)の仮説は、従来説明のつかなかった以下(d)の現象の説明に役立つ。

- (d) 補文への下降移動(affix hopping)の仮説によって、主語を引き抜いた場合の\**that-trace*の問題、(1a)に見られる *that* の省略の可能性、(2b)に見られる *For-To* の禁止、および関係詞節における *that* の生起などの説明が出来る。

(6)に関しては、1節で具体例に沿って説明する。

## 1.2. 日本語について

標準日本語では、補文標識「と」は必須要素である。ただし、補文が疑問文の場合には、動詞によって「と」の代わりに「か」が選択される。

- (7) a. 私はキャシーが予定より早く来るほうがよいと思う。
- b. 君は誰がキャシーを誘ったと思いますか。
- c. 君は誰がキャシーを誘ったか知っていますか。

(8)も標準日本語で補文標識「と」が必須要素であることを示している。

- (8) a. 池田君が来る と/って 言ってたよ。  
 b. \*池田君が来る 言ってたよ。  
 c. 池田君が言ってたよ、来る ?と/って。  
 d. \*池田君が言ってたよ、来る。

これらの例をみると補文標識「と」は1種類のみで下位分類を許さないようである。しかし、「戸を開けてみると雪が降っていた」に見られる接続詞としての「と」以外に、2種類の補文標識「と」があると考えられる。

関西方言では、(9b)のように「と」の省略が許される。

- (9) a. 池田君が来る と/って 言うてたよ。  
 b. 池田君が来る 言うてたよ。  
 c. 池田君が言うてたよ、来るて。  
 d. \*池田君が言うてたよ、来る。

((9c, d)が示すように、右方転移された文では「と」または「って」の生起が要求される。)

本論文では、Kim の仮説(6a, b, c) ((10)として再掲)を支持し、上記の日本語の資料の説明を試みる。具体的には、(i)補文標識「と」が標準日本語において必須要素であること、(ii)補文標識が主文動詞の位置に上がるという(6b)の仮説に日本語から根拠を与えることができるかどうかという問題の解決を試みる。(iii)結果として2種類の補文標識「と」を認める根拠を示す。

(10) Kwang-sup Kim:

- (a) 語彙部門には、接辞としての null C のみが存在する。
- (b) null C は補文動詞の位置に下がることも、主文動詞の位置に上がることもできる。
- (c) 補文標識 *that/for* は、構造上 null C が接辞として付加できない場合に最後の手段として音韻部門で挿入される。

特に、日本語では補文標識「と」が主文動詞の位置に上がるという仮説が提出されたことも、これを論証する試みも行われたことがない。本論文では新しい資料を用いて、二種類の「と」、補文標識句(CP)内に留まる「と1」と主文動詞の位置に上がる可能性を持つ「と2」を仮定する。

第2節では、Kimによる英語資料の分析を紹介し、第3節では日本語の補文標識「と」の特徴と分布について述べ、第4節で(6a, b, c)、特に(i)(ii)の仮説の論証を試みる。

## 2. Kim による英語の資料の分析

### 2.1. \**that-t*, \**for-to* について

補文の時制辞の位置に補文標識を下降させることにより、\**that t*、\**for-to* の生起を排除することができる。

(11) Who do you think (\*that) t loves Tom?

(*that*-trace effects) (Kim (1))

(12) a. [CP t<sub>i</sub> C<sub>affix</sub> [TP t<sub>i</sub> T [VP love Tom ]]]: T-to-love hopping

(Kim (2))

b. [CP t<sub>i</sub> C<sub>affix</sub> [TP t<sub>i</sub> [VP [T [love]T]Tom]]]: C-to [love T] hopping

c. [CP t<sub>i</sub> [TP t<sub>i</sub> [VP [C C [T [love] T]] Tom]]]

(11)において *that* の挿入が不可能なのは、*that* 挿入が *do* 挿入の場合と同じく、接辞の下降が不可能な場合に最後の手段と

してのみこれらの挿入が許されるのに対して、(12)では補文標識 T と C の下降を阻むものがなく、T と C の下降が順次行われるからである。

(13)(14)は、接辞下降が不定詞補文に適用した場合である。

(13) a. I would like (very much) for Mary to pass the exam.

(Kim (5))

b. I would like Mary to pass the exam.

(14) a. Who would you like [t to pass the exam]? (Kim (6))

b. \*Who would you like [for t to pass the exam]?

(15)は不定詞補文をも視野に入れて(6)を修正したものである。

(15) a.  $C_{[+finite]}$  も  $C_{[-finite]}$  も音形を持たない接辞である。

(Kim (7))

b.  $C_{[+finite]}$  も  $C_{[-finite]}$  も上方または下方移動により他の構成素に付加しなければならない。

c. 接辞付加が構造上不可能な場合には、最後の手段として  $C_{[+finite]}$  には *that*、 $C_{[-finite]}$  には *for* を挿入しなければならない。(‘\*that t’, ‘\*for to’ effects)

(16)は具体例である。

(16) a.  $who_i$  would you like [ $_{CP}$   $C_{affix[-finite]}$   $t_i$  to pass the exam]: C-to-to hopping (Kim (8))

b.  $who_i$  would you like [ $_{CP}$   $t_i$  [ $_{to}$   $C_{affix[-finite]}$ ] pass the exam]

(12)(16)では、主語の引き抜きにより、補文標識が *to* の位置まで下降しこれと結合することを阻止するものがないために *that/for* の挿入が不可能になる。

## 2.2 *That* 挿入に資する操作

(17) Everybody expected (that) Mary would pass the exam.

(Kim (9))

(18) everybody T [v expect [<sub>CP</sub> C<sub>affix</sub> [Mary would pass the exam]]] (Kim (10))

(C は *expect* の位置に上がることができるが、補文主語 Mary に阻まれて補文内に下降することができない。したがって *that* 挿入が可能になる。)

(19)は形態上の操作に関する一般則である。

(19) 形態上の理由で行われる操作の適用には順序がない。

(Kim (11))

ただし、(20)の条件がある。

(20)An affix X can merge with Y only if X selects Y or Y selects X.

(Kim (12))

接辞 X は、X が Y を選択するか、Y が X を選択するかのどちらかの場合にのみ、Y と結合することができる。

(21) a. everybody T [v expect [C [Mary would ...]]]:

C-to-expect movement (Kim (13))

b. everybody T [[v [<sub>expect</sub> C expect][Mary would ...]]:

[<sub>expect</sub> C expect]-to v movement

c. everybody T [[v [<sub>expect</sub> C expect] v] [Mary would ...]]

[C [<sub>expect</sub>]]は v によって選択されているので、v の位置に移動し v と結合することが出来る。したがって、*that* 挿入はできない。



- (22) a. everybody T [<sub>v</sub> expect [<sub>CP</sub> C<sub>affix</sub> [Mary would ...]]]:  
*expect-to-v* movement
- b. everybody T [<sub>v</sub> expect v][<sub>CP</sub> C<sub>affix</sub> [Mary would ...]]:  
 この場合 C-to [<sub>v</sub> *expect v*]への引き上げはできない。  
 なぜなら [<sub>v</sub> *expect v*] は C を選択しないからである。  
 それ故に、*that* 挿入が行われて(22c)が出来る。
- c. everybody T [<sub>v</sub> expect v][<sub>CP</sub> that C<sub>affix</sub> [Mary would ...]]  
 (Kim (14))  
 (すなわち、この場合は V-to-v の引き上げが C-to-V  
 の引き上げの前に適用されているのである。)

- (23) Who do you think (\*that) t loves Tom?  
 (*that*-trace effects) (Kim (15))

- (24) a. [<sub>CP</sub> ti C<sub>affix</sub> [<sub>TP</sub> ti T [<sub>VP</sub> love Tom ]]]: T-to-love の下降  
 (Kim (16))
- b. [<sub>CP</sub> ti C<sub>affix</sub> [<sub>TP</sub> ti [<sub>VP</sub> [<sub>T</sub> [love]T] Tom]]]:  
 C-to [love T]の下降
- c. [<sub>CP</sub> ti [<sub>TP</sub> ti [<sub>VP</sub> [C C [<sub>T</sub> [love] T]] Tom]]]

C は[love T]の位置に下降しこれと結合しているので、*that* は挿入できない。

- (25) everybody T [<sub>v</sub> expect[<sub>CP</sub> C<sub>affix</sub> [Mary would pass the exam]]] (Kim (17))

(25)は(22)と同様に、補文主語 Mary に阻止されて C が補文に下降できないので *that* 挿入が行われる。

要するに、(22)のように *expect-to-v* の移動が C-to-*expect* 移動の前に行われれば *that* 挿入が必要になり、逆の順序ならば *that* 挿入は出来ない。

次に、外置変形(*extraposition*)が適用されれば、*that* 挿入が義務的になる。

- (26) a. [<sub>VP</sub>[<sub>VP</sub> v expected] t<sub>i</sub> [C Mary would pass the exam]<sub>i</sub>]:  
*that* 挿入 (Kim (19))
- b. [<sub>VP</sub>[<sub>VP</sub> v expected] t<sub>i</sub> [that C Mary would pass the exam]<sub>i</sub>]

外置された補文からの抜き取りに関しては、主語と目的語の間に文法性の差がある。

- (27) a. Who<sub>i</sub> do you believe t<sub>j</sub> sincerely [t<sub>i</sub> likes Natasha]<sub>j</sub>?  
 (Kim (20))
- b. \*Who<sub>i</sub> do you believe t<sub>j</sub> sincerely [Natasha t<sub>i</sub>]<sub>j</sub>?
- (28) a. Who<sub>i</sub> do you believe t<sub>j</sub> sincerely [<sub>CP</sub> t<sub>i</sub> C [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> T likes Natasha]]<sub>j</sub>? (Kim (21))
- b. \*Who<sub>i</sub> do you believe t<sub>j</sub> sincerely [<sub>CP</sub> t<sub>i</sub> C [<sub>TP</sub> Natasha T [likes t<sub>i</sub>]]]<sub>j</sub>

(28a)では、外置補文の主語 *who* が抜き取られているので、C は T の位置に下降することが出来る。したがってこの文は適格文であるが、(28b)では、補文主語 *Natasha* に遮られて、C の下降が不可能であり、この文は非文になる。

まとめると、音形をもたない補文標識 *null C* が主文に上昇して主文動詞と結合するか、補文に下降するかによりその位置がきまらなければ、よりどころの無い(*dangling*)拘束形式(*bound form*)になる。これを防ぐ最終手段として *null C* に *that* または *for* が音韻部門で挿入されるのである。

### 3. 日本語の補文標識「と」の特徴と分布

(29)は標準日本語の例である。

- (29) a. 池田君が来る と/って 言ってたよ。  
 b. \*池田君が来る 言ってたよ。  
 c. 池田君が言ってたよ、来る ?と/って。  
 d. \*池田君が言ってたよ、来る。
- (30) a. 花子が池田君が来る と/って 言ってたよ。  
 b. 池田君が来る\* (て/と) 花子が言ってたよ。  
 c. 花子が言ってたよ、池田君が来る\* (て/と)

上記のように、標準日本語では null C は許されないように見える。これを逆にみると、日本語の null C は常によりどころの無い(dangling)拘束形式と考えられる。

#### 4. Kim の仮説(6a. b. c)に対する日本語からの論証

##### 4.1. 関西方言に見られる null C

(31)は関西方言の例である。

- (31) a. 池田君が来る と/って 言うてたよ。  
 b. 池田君が来る 言うてたよ。(null C)  
 c. 池田君が言うてたよ、来るて。  
 d. \*池田君が言うてたよ、来る。  
 (null C は外置補文には許されない。)

関西方言では(31b)に見られるとおり null C が許容される。これを null C の仮説の一つの根拠とすることが出来る。

##### 4.2. 標準日本語の場合

###### 4.2.1. 必須要素としての補文標識

標準日本語では、(29)(30)で示した通り、補文標識「と」は音形を持って補文に続かなければならない。これが(6)(i)の問題提起である。これにたいする回答としては、日本語の動詞は屈折接辞、派生接辞により語尾を積み重ねて複合動詞を作るが、語頭接辞を除いた拘束形式を語頭に結合させることがで

きない。したがって、null Cは主文動詞の前の位置では拠り所がない(dangling)存在である。したがって、最終手段として常に音形「と」が与えられている。

#### 4.2.2. 補文標識の主文への上昇

それでは主文への上昇は許されないのであろうか？次に挙げる(32)は主文への上昇を示すものと考えられる。

- (32) a. 東芝は 4-9 月期の人件費などの固定費削減額を 2 千億円と、従来計画より 670 億円上積した。  
b. 1「25%削減なんて過激なことは言わない方がいい」と、押し返す高木氏に...

(日経新聞、2009 年 11 月 2 日)

これらの例は「とし」「と言い」の動詞「し」「言い」の位置に「と」が上昇し、動詞が省略されたものと分析できる。これによって null C の上昇の仮定に日本語からも根拠を与えることが出来る。

主文への null C の上昇によって説明できる(32a)と(32b)の間には構造上の差がある。次の(33)は(32b)と同様に「と言い」が省略されたものである。

- (33) 武田が応答する。ルソーが記述した「合意」=「契約」は人民主権を保障する理念。商行為を含む個々の契約を成立させる土台となる。根本のルールなのだ。

(日経 2009, 11, 22, 31 面)

このように「と言い」が省略された文は後置することが出来る。それに反して、(32a)のように「とし」の省略された文では、補文の後置は良くない。

- (34) ?東芝は従来計画より 670 億円上積みした、4-9 月期の人件費などの固定費削減額を 2 千億円と。

これは、「と言い」を基底とする文は、補文を選択しており、そのために補文を後置しても意味のつながりが保たれる。「とする」の方にはそのような選択制限がないので補文と主文の位置関係が重要な働きをすると考えられる。

(35) 「と言い」文

- a. ...忘年会くらいはいつもと違う雰囲気ですとパッと楽しみたいということでは」と話しているよ。「節約疲れ」なんじゃないかって。(朝日 2009, 11, 22. 32 面)
- b. 「あぶらを使わなくても調理できることが消費者のヘルシー志向とマッチしました」と 伊勢丹新宿店でキッチン雑貨を担当する杉原正則さん。  
(朝日 2009, 11, 22. 23 面)
- c. 今は新そばのシーズン。週末は県外からの観光客でにぎわいます」と岡崎優美子店長。  
(朝日 2009, 11, 22. 24 面)
- d. 企業側には従来の所管庁に加え、消費者ともやりとりをする分、手間が増えるとの不安がある。  
(日経 2009, 11, 23, 27 面)
- e. 「当社にとって極めて重要な事業だ」と創業者のホー・クオンピン会長。(同 6 面)
- f. この日は「イチロー選手の本を、緊張した場面で何度か思い出した」と有村。(日経 2009, 11, 23. 27 面)
- g. 「のびのび滑るのは実は難しいと分かった。ここにトップとの差を感じた」と鈴木。(同)
- h. どこにいるのかも分からなかったと話し、「夜にゆっくり電話する」と切ったという。
- i. 逆に、授業中に指名されただけで震えて声が出ないような子に限って、なぜかテストだけは平気とか。  
(同 19 面)

(35d)の「と」に続く「の」は「言う」に代えることができ、補文を名詞化する役割を果たしている。(35h)では「と言って」が基底にあり、「と」によって「言って」が吸収されたものと考えられる。(35i)はさらに興味深い例で、「と」によって補文が独立文として認可され、それに疑問詞「か」が付加されたものである。

(36) 「となり」文

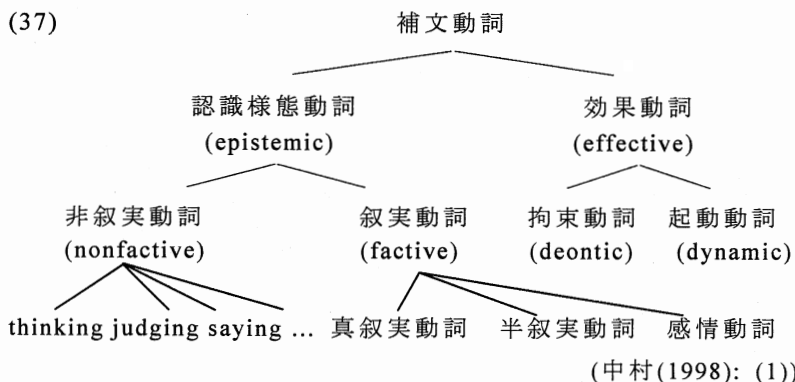
- a. ダウ工業株 30 種平均は前週末比 132 ドル 79 セント高の 1 万 0450 ドル 95 セントと、約 1 年 1 カ月ぶりの高値で終えた。(日経 2009, 11, 24. 3 面)
- b. 政府がデフレを正式に認定したとなると、世間の目は通貨の価値に責任を持つ日銀に向かう。  
(毎日 2009, 12, 6. 5 面)

(36a)の「1 万 0450 ドル 95 セントと」も「1 万 0450 ドル 95 セントとなり」を基底としている。

#### 4.3. 補文標識 *that/for* にたいする選択制限

Kwang-sup Kim によれば、*that/for* は構造上 null C が他の要素に付加できない場合に、最後の手段として音韻部門で挿入される。(6c) しかし、補文を取る動詞の意味によって *that/for* の選択が決まっている。(37)は Long (1976)に基づく中村 (1998)の補文動詞の意味分類である。

(37)



上記の中村の分類では、認識様態動詞は非叙実動詞 (non-factive) と叙実動詞 (factive) に分かれており、さらに叙実動詞は真叙実動詞、半叙実動詞、感情動詞に分かれている。これらの動詞は補文標識として *that* を選択し、効果動詞は *for* を選択する。前者には *believe, regret, claim* などがあり、後者には *compel, try* などがある。

次に、*that* を選択した場合には、定時制辞 (finite tense) を取らなければならない。これを先に述べた C[+finite] によって表している。*for* には C[-finite] の指定があり、定時制辞を取ることができない。時制辞の選択も補文動詞の意味によるものとする事ができる。すなわち、認識様態動詞は、factive verb として補文の表す命題が事実であるという前提を持っている。これを定時制辞が保障するのである。

以上の考えをまとめると、*that/for* は null C に抛り所が無い場合に最後の手段として音韻部門で挿入されるのであるが、どちらを挿入するかは補文動詞の意味によって決定される。

#### 4.4. 「と言う」「とする/となる」:二種類の「と」

「と言う」の「と」を「と 1」、「とする/となる」の「と」を「と 2」とする。いずれも(38)の内部構造を持つ CP 領域に存在す

るが、「と 1」の方は、典型的な補文標識で FiniteP の Spec の位置を占め、その主部 Finite によって続く TP を補文として認可する。「と 1」を選択する動詞は「と言う」に代表される発言動詞(verb of saying)である。「述べる」「説明する」「陳述する」などもこの類に属す。「と 2」の方は「とする/となる」と合体し、発話力を持つ。したがって主文動詞にたいする選択制限が存在せず、「と 2」補文は独立文に近い。そこで、「と 2」は(38)の ForceP の主部として認可されると考える。(38)は Rizzi (1997)による CP の内部構造である。

(38) Force > Topic > Interrogative yes/no > Topic > Focus > Modifier > Topic > Fin > IP (Rizzi (60))

「と 2」は CP 領域の最上部に存在し、この位置から発話力を持ったまま直上の文に引き上げられその文の動詞と結合することができるのである。

## 5. まとめ

補文標識は基底では音形を持たない拘束形式で主文に上昇することも、補文に下降することもでき、それぞれの動詞と結合するという Kim の仮説が日本語に適用し、これまで全く検討されなかった補文標識「と」の統語上、意味上の重要な役割を明らかにすることができた。英語の補文標識 *that/for* は日本語の「と」と異なり拘束形式として本来の null C のもつ上昇、下降の可能性を失っている。その意味で本論文において明らかになった日本語の「と」の機能は null C の仮説に確かな根拠を与えるものと考えられる。



## 参照文献

- Bošković, Željko, and Howard Lasnik. 2003. "On the Distribution of Null Complementizers," *Linguistic Inquiry* 34: 527-541.
- Kwang-sup Kim. 2008. "English C Moves Downward as well as Upward: An Extension of Bošković and Lasnik's (2003) Approach," *Linguistic Inquiry* 39: 295-360.
- Long, M. E. 1976. *Semantic Verb Classes and Their Roles in French Predicate Complementation*, Doctoral dissertation, University of Indiana, Bloomington.
- 中村 捷. 1998. 「補文動詞の意味構造」平野日出征・中村捷 (編)『言語の内在と外在』119-159. 東北大学文学部
- Pesetsky, David. 1991. *Zero Syntax. Vol. 2: Infinitives.*, ms. MIT.
- Rizzi, Luigi. 1997. "The Fine Structure of the Left Periphery," Haegeman, L. (ed.) *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, 281-337. Dordrecht, Kluwer.

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

[inoue@kanda.kuis.ac.jp](mailto:inoue@kanda.kuis.ac.jp)